

平戸度島スタディ（MGD検診）：島民における流涙感とマイボーム腺機能不全との関係

福岡 詩麻^{1,2,3)}，溝口 尚則^{1,4)}，川島 素子^{1,5)}，高 静花^{1,6)}，白川 理香^{1,3,7)}，鈴木 崇^{1,8,9)}，森重 直行^{1,10)}，有田 玲子^{1,11)}

LIME研究会¹⁾，大宮はまだ眼科西口分院²⁾，東京大³⁾，溝口眼科⁴⁾，久喜かわしま眼科⁵⁾，大阪大⁶⁾，東都文京病院⁷⁾，東邦大・大森⁸⁾，いしづち眼科⁹⁾，大島眼科病院¹⁰⁾，伊藤医院¹¹⁾

【目的】以前、我々は平戸度島検診によるマイボーム腺機能不全(MGD)の有病率は32.9%であったと報告した。また、ドライアイとMGDを鑑別する自覚症状として最も可能性の高いのは「流涙感」であることも報告した。今回は平戸度島検診のなかで流涙感を訴える住民の特徴をより詳しく解析したので報告する。

【方法】6歳以上の島民を対象とし、MGDワーキンググループによる2010年版のMGD診断基準にしたがって、流涙感を含む眼症状に関する問診、細隙灯顕微鏡による眼瞼縁所見、マイボーム腺グレード(0-3)を評価した。流涙感を訴える割合とそのうちのMGDの割合、流涙感と性別・年齢との関係について検定を行った。加えて、流涙感について年齢性別特異曲線GAM解析を行った。

【結果】検査可能であった島民355名(男性133名、女性122名、年齢6～96歳、平均54.5±22.4歳)を解析対象とした。110例(31.0%)に流涙感があり、うち53例(48.2%)がMGDであった。流涙感ありの方がなしの島民に比べ有意にMGDである率が高かった($p<0.001$)。年齢が高いほど流涙感を訴える割合が高く($p<0.001$)、18～39歳では16.7%であったが65歳以上では43.2%であった。流涙感の割合に性別による有意差はなかった($p=0.91$)。

【結論】平戸度島検診を受けた島民のうち約3割が流涙感を訴えた。そのうちの約半数がMGDであった。流涙感を訴える患者をみたらMGDも鑑別診断の有力な候補と考える必要があることが示唆された。

【利益相反公表基準】 該当有

【IC】 取得有

【倫理審査】 承認有